

G・T・フランス著 岩槻邦男監訳 『地球植物誌 絵画—人間と自然との共生を促かる』 絶伊園 図書局 1997年 255ページ

著者は植物学者でロンドンのキュー植物園園長。関連する論文を集成した本書は、アマゾンの熱帯林の豊かさ、種の多様性を多くの写真と図版、平明な文章によって語り、その保全の必要性を説いている。熱帯林の樹木、川と雨、花と果実、森の民インディオによる森の利用、開発とアマゾンの将来などの章からなる。

この本は読者に熱帯森をふくむ自然環境の仕組みの不思議さ、微妙な（したがって危うい）均衡、そしてインディオの森との共生のための知恵を教えている。熱帯林は現在でも急速な勢いで減少し続けている。その消滅は人類にとって有用な種を失わせ地球全体の気候、環境に影響を与える。著者は熱帯林破壊の主たる要因を北半球の消費社会に見ている。

本書が多くの人々の間で読まれることを期待する。
(小池洋一)

伊高浩昭著 『メヒコの芸術家たち シンケイロスから大道芸人まで』 現代企画室 1997年 241ページ

メキシコ芸術と言えば、色鮮やかで、グロテスクにさえ感じるほどのインパクトで、革命、貧困、弾圧、インディオへのアイデンティティーなど社会的テーマを扱う巨大壁画が思い浮かぶ。

著者はジャーナリストになったばかりの時期、20代の8年間をメキシコで過ごしたが、メキシコの芸術家たち——著者はいわゆる「芸術家」に加え、街の大道芸人やボクサーも含めている——は若い著者

に多くのことを教えた。

本書は著者が面談を重ねたり個人的に親交のあったメキシコ人芸術家の考え方や生活の様子を紹介することで、革命以降のメキシコの社会思想の流れや社会問題を浮き彫りにする。とくに前半のシンケイロスやタマヨと言ったメキシコを代表する、しかし芸術的立場としては相反する巨匠を両方取り上げることで、革命以降現代にいたるまでの、メキシコの知識人たちの社会悪に対する葛藤、そしてその中でのジレンマがうきぼりにされている。またタイトルにもあるように著者は一貫して「メキシコ」ではなく「メヒコ」で通しているが、そこに彼のメキシコに対する熱い思いが感じられる。

(坂口安紀)

岡中 浩著 『日本紡績業の中米進出』 古今院 図書局 278ページ 1997年

本書は、中米における綿花生産および紡績業の発展と、日本繊維企業との関わり合いについて分析したものである。日本では類書がなく、また著者の現地体験も生かされ、大変興味深い内容となっている。

日本紡績業と中米の関わりは戦前からかなりの水準にあったが、戦後朝鮮戦争を契機とした世界的な綿花不足のために中米が注目されることになった。著者は、外国投資においては、単なる利益獲得を目的とする場合よりも相手国の発展を考慮しながら行なう方が、長期的に見て企業にとってもプラスになるとの観点から、その好例としてエルサルバドルのユサ社とインシンカ社、およびコスタリカのティカ社の例を取り上げ、その経営を比較している。その

成果としてユサ社では、1980年代の内戦のために日本人社員が去ったあとも、そして他の外国合弁企業のほとんどが撤退する中でも、現地社員の手によって操業が続けられた、というエピソードは感動的である。

1990年代の自由化の中で、中米の繊維産業も新たな試練の時代を迎えている。安価なアジアの繊維製品と競争していくために、これまでにない工夫が求められている。上記の3社が取り入れた日本式経営がこの新しい環境の中でどのように生かされるか、今後も興味深いテーマであり続けるだろう。

(山岡加奈子)

山岡加奈子「アンデスの宗教的世界」明石書店
1997年、380ページ

本書は、ペルーのアンデス地域において先スペイン期より続く山の神信仰の全容を明らかにすることを目的とした研究書である。著者は、1988年から93年にかけてクスコ県でフィールドワークを実施し、本書ではその研究成果が集大成されている。

山の神信仰がどのような観念体系を持つものなのか。アンデスの「インディオ達」がそれを日常生活の中でいかに実践しているのか。そして、この信仰が歴史的文脈の中で外部世界とどのような関係性を持ってきたのかが明らかにされている。

日本人にとって想像を絶する宗教世界である山の神信仰が綿密なフィールドワークの下に体系的かつ学術的に解明されている点、また、古代から続くこの信仰が、ペルーという国家のアイデンティティ形成の中でどのような影響を与え、また逆に影響を受

けてきたのかということが考察されている点など非常に興味深い。

(村井友子)

山岡加奈子「キューバ、国際環境への適応と経済政策」(アジア・太平洋・ラテンアメリカ経済研究所、1997年、30ページ)

冷戦が終結した今日、キューバは世界に残る数少ない社会主義国のひとつとなっている。現在、キューバ政府は革命の原則である平等主義を維持しつつも部分的な経済開放を行ない、新たな国際環境の下で生き残る道を模索している。

本書は、キューバを取り巻く国際情勢および、同国がこれまで取ってきた経済政策を分析することによって、この国が直面している現状を客観的な見地から明らかにしたものである。

まず第1章では、対米関係を軸に米国の対キューバ制裁強化法案であるトリセリ法、ヘルムズ・バートン法の解説および同法が及ぼす影響について考察、第2章では革命から現在までのキューバの経済政策を検証、さらに、第3章では第2章をふまえた上で、現在行なわれている経済改革の内実を分析、評価している。第4章では、ソ連崩壊後に本格化した外資導入政策の現状を明らかにしている。

冷戦後のキューバの実態を知る上で貴重な一冊である。

(村井友子)